

天候気候に「喜」憂することをやめたことにより、身体にも行動にも良い変化が起きた経営者の事例です。

Tさんは、関東地方の商店街で美容院を経営しています。妻と従業員二人と共に、確かな技術と丁寧なサービスを提供し、馴染みのお客様も増えていきました。

仕事は順調でしたが、Tさんには悩みがありました。それは、仕事柄、手が荒れてしまうことです。特に、夏と冬だけが酷くなり、その原因が思い当たらないのです。

ある日、同業の仲間から、倫理法人会主催のモーニングセミナー MS への参加を誘われました。さっそく早起きをして出かけると、その日のテーマは、天候気候の倫理でした。Tさんは、講師の話に耳を傾けました。

その中で、力の力ではどうすることも出来ない天候気候を嫌って不足不満を持っていると、その心のあり方が業績の悪化や皮膚病などの病気を引き起こす」という話を聞き、ハッとして、手荒れの原因に気づいたのです。

美容師として雇われていた時とは違って、経営者となったTさんは、お客様が、予約通りに来てくれるだろうか」と不安に思っていました。美容院の存続や従業員と自分達の生活にも影響を及ぼすため、天気によってお客様の出足に影響が出ないかどうかと、いつも気にしていたのです。お客様の中には年配の女性も多く、冬は風邪をひいたから「夏は熱中症が心配だから」と言っていて、予約をキャンセルされることがあり、その度に天気を恨

自然賛歌

晴れの日も  
雨の日もまた良い



めしく思っていたのです。

その後、TさんはMSで講師が紹介していた新出版純粋倫理入門』丸山敏秋著の「天候気候の倫理」の項目を読んでみることにしました。そこには、「天候気候の倫理」のポイントは「順応」と「畏親」にあります。いつでもどこでも天候気候をそのままスナオに受け取って、少しも不足に思わず、しかるべき手だてをして従い応じる。天候気候は人為ではどうにもならない偉大な力だと敬い畏れ、なごやかな心で親しむ。それは親に対する孝、他人に対する「和」と同様に、大自然に対する人の正しい道なのです」と記されていました。

Tさんは、夏は暑さや台風、冬は寒さや雪などの悪天候を嫌っていました。その際には、心の中に重いわだかまりが募っていたことを思い出しました。そして、天候気候に不満を持っても、天気が変わるわけではない。むしろ、生活と切っても切れない天候気候に感謝をしよう」と決めたのです。そう思うと不思議なもので、天候の善し悪しに「喜」憂することがなくなりました。

予約のキャンセルがあっても、また、次回お願いします」と明るく受け止めることができるようになりました。キャンセルで空いた時間は、皆で店の掃除をしたり、勉強会をしたりと有効に使うようになりました。気がつく、いつの間にか手荒れも良くなりました。心を持ち方によって、体にも仕事に対する姿勢にも、良い変化が起きたのです。